

女性スポーツの参加資格をめぐる哲学的考察

－ダイバーシティと参加規定の観点から－

井澤 真帆 (大分大学)

1. はじめに

スポーツは多様性を受容する場である一方、公平性を保障するためのカテゴリー化が不平等や排除を生じさせており、現代スポーツの課題や問題点が指摘されている¹⁾。来田は性差の認識について明らかにし、性別確認検査の歴史的背景や方法、問題点を取り上げている²⁾。そこで本研究ではカテゴリー化による不平等について考察するために、*Inclusion and Exclusion in Competitive Sport* (2015)³⁾を用いて、女性スポーツの参加資格と性別確認検査の変容及び問題点を明らかにすることを目的とした。

2. 研究方法

まず、スポーツにおける女性の参加とその変遷について述べ、次に、性別確認検査の移り変わりに着目し、これらに関わる諸事例について整理する。そして、性別によるスポーツのカテゴリー化がもたらした不平等や問題点について検討し、今後の女性スポーツにおける課題について集約する。

3. 女性スポーツの発生と性別の捉え方

近代スポーツは男性中心の文化として成立した。その後、女性スポーツは女性の過度な身体運動に対する批判や女性自身の批判の受容といった抑制の側面と女性たちの活動や戦後の国際社会の価値観の変化といった促進の側面を伴いながら発展していった。

4. 女性の参加資格をめぐる諸事例と規定

性別確認検査は公平性を求めて導入された。初の検査は外見のみに基づくもので、その後、典型的な染色体の定義に基づくものへと移り変わった。1991年に検査の不正確性や違法性から検査の廃止が促されたが、1992年には以前とは異なる染色体検査が導入され、そして2000年に再び検査が廃止された。これらの検査は身体的な優位がスポーツにおける優位を生じさせることを前提にしており、性別の二分化を支え、その区別が排除を招いた。

Patelは5人の女性選手の事例を取り上げており、彼女らの状態は様々で、いずれのケースにおいても競技から除外されたり望まない状態を要求されたりした。なかでも、特に注目されたのはCaster Semenyaである。彼女は性別を疑われ、様々な専門家が関わる検査を受けるように求められたが、彼女は検査結果を認めなかった。その後、IAAF、南アフリカ政府、法定代理人が検査結果を内分に処理した。彼女は検査の合法性について法的な問題を挙げ、DAWにIAAFが基本的人権の侵害を主張して提訴に踏み切り、その後、IAAFは人権侵害を認めた。彼女の事例の注目点は、彼女の性別をめぐる法的な問題があるという主張が受け入れられ、人権侵害が存在したことが認められた点、検査に関わる様々な専門家や多数の機関を巻き込んだ点にある。

5. 結論

性別確認検査は、性別を二分する仕組みとして整えられた。これらは男性優位の固定観念が未だ根強く存在していることを示している。さらに本研究で検討した事例は多様性の受容が可能なスポーツが一方で排除を生み出していたことを示唆している。それらのことは、我々にスポーツに対する新たな見方や考え方を求めている。

【主要参考文献】

- 1) オットー・J・シャンツ, スポーツにおける多様性と差別 (日本語訳版), 第66回日本体育学会学会 本部企画I キーノートレクチャー配布資料, 2015年, pp.7-10.
- 2) 来田享子, 「近年のハイパフォーマンス・スポーツ界における性差認識の変化ー性別確認検査の廃止とIOCによる性別変更選手の参加承認を事例としてー」, 『ジェンダー研究』第8号, 東海ジェンダー研究所編, 2005年, pp.29-44.
- 3) Seema Patel, *Inclusion and Exclusion in Competitive Sport*, Routledge, London and New York, 2015, pp.85-95.